

うちの  
みんな  
読んでね

## 歓喜の仏縁週間～真宗のお盆

お盆の風習にはいわゆる追善供養の色彩が強く、実は非真宗的です。まず、浄土往生された方には娑婆世界が積むべき「追善」の必要はなく、帰ってくるべき「霊」の存在は認められませんし、仏になられた方の「還相」（迷いの世界にいる者を目覚めの方向へと導く姿）は、お盆の時期にだけに限られたものではありません。ではなぜ、この「お盆」を真宗寺院でも行うのでしょうか。

現在、お盆は国民的行事として定着し、まとまった休日をとって故郷や実家に集うために交通機関などは大変混雑します。この故郷への求心力が今後続くかどうか不明ですが、少なくともその力を保持している間に、親族みんなが集う貴重な機会として、そして家族揃ってご先祖に向き合い、仏縁・仏事を維持することには大きな意味があるのではないのでしょうか。

いわば、この時期を「親族全員聞法週間」と規程したらどうでしょう。かつて浄土真宗では、お盆のことを「歓喜会（かんぎえ）」と称していました。家族親族それぞれが、今回も平穏で元気に顔を合わせることを慶び、ご先祖を通して生き死のありように思いを馳せ、つまるところは阿弥陀仏のお慈悲。救いの働きに出遇っていたことを慶ぶ、まさしく「歓喜」の仏縁習慣に再生してはいかがでしょうか？（参照「季刊せいてん」123号）

本願寺新報 2020 お盆号



＊中国・道教において贖罪の意味がある「中元」7月15日は、死者・先祖を供養する行事とされてきた。一方、お盆の由来とされる『仏説盂蘭盆経』（中国で成立したとされるが異論も）では、目蓮尊者が餓鬼道に落ちた母親を救うため、僧侶らにご馳走をふるまったのが、夏安居（修行）が終わる日7月15日である。お盆はお供えを載せた器の意味とされる。現在では、盂蘭盆会と中元は習合しており、明確な区別はつかない。

＊中国・道教において贖罪の意味がある「中元」7月15日は、死者・先祖を供養する行事とされてきた。一方、お盆の由来とされる『仏説盂蘭盆経』（中国で成立したとされるが異論も）では、目蓮尊者が餓鬼道に落ちた母親を救うため、僧侶らにご馳走をふるまったのが、夏安居（修行）が終わる日7月15日である。お盆はお供えを載せた器の意味とされる。現在では、盂蘭盆会と中元は習合しており、明確な区別はつかない。

また、盂蘭盆経には「霊が帰ってくる」という記述はなく、日本の民族信仰「霊祭り」（正月と7月）に由来するものとされる。仏教各派で務まる「施餓鬼会」も、飢えと渴きに苦しむ衆生を供養する法要だが、元はお盆と別の法会だったのが、江戸時代ごろに一緒になったと言われる。多種多様な要素が入り混じって出来上がったのが日本の「お盆」である。

# 自分のあり方に

痛みを感じるときに

人の痛みは

心が聞かれる

◆大谷派で教学研究所所長など歴  
任された宮城先生は、上に続けて  
「一人一人には、他の人には分から  
ない心の痛み、その重さがあると  
いうことが、わかるということ  
です」と述べられています。

随分前に、ある方が広島赤十  
字・原爆病院を訪問し、「病は気か

らと申しますから、気をしっかり持つてください」と原爆症に苦しむ方々  
に声をかけられました。その言葉に被爆者の方々は、言いようのない深  
い悲しみを抱かれたそうです。原爆による後遺症は一般の傷病と違いま  
す。言葉をかけた人も戦争体験者であり、戦争による悲しみ・痛みを承  
知しておられるはずですが、相手の痛みを想像できなかったのは、自分  
の痛みや悲しみに真摯に向き合っていないからかもしれません。

親鸞聖人はご和讃(悲嘆述懐)の中で、次のように述べられます。

・悪性さらにやめがたし ころろは蛇蝎のごとくなり

・修善も雑毒なるゆゑに 虚仮の行とぞなづけたる

・無慚無愧のこの身に 功徳は十方にみちたまふ

・弥陀の回向の御名なれば 功徳は十方にみちたまふ

つまり、他者を傷つけることを抑えられぬ人間の行いは、たとえ善い  
行いでも偽りでしかない。罪を恥じることないこの身に真実はないが、  
お名号の功徳はすべての衆生に満ち渡っている。自分の言動で人が傷  
つくことの愚かさを恥じる時、世界中で紛争や災害によって傷つき悲し  
む人々へも無関心でいられなくなるのではと思います。(引用「月々の言葉」)

## 教えて、お坊さん ②③

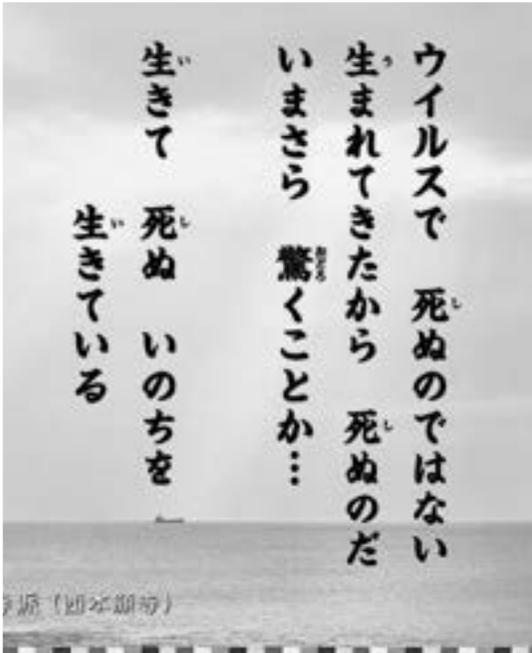
### 今後は、ウチも家族葬でいいかな?と思うんです...

コロナ禍で、以前からの家族葬・小規模葬(近親者のみ)が定着してしまう  
のかも?(通夜の回り焼香は嶺北だけの慣習だった)。家によって置かれた事  
情や考えはそれぞれだが、家族葬の功罪については良く調べておいたほうがいい。

そもそも「家族葬」という定義はあいまいで、規模から言えば一般葬に近いものから直  
葬(家に戻らない)のような場合もある。あえて共通項を挙げれば、在所や職場関係の香  
典を受け取らない(帳場係を立てない)ということに見えるが、これも実態はさまざま。

今は三蜜を避けるために大きなホールを使って、司会進行や焼香読み上げ・会葬者へ立  
礼・喪主挨拶と形式ばり、帳場も立てば、せつかくのアットホームな雰囲気は損なわれがち。  
香典が入らないということは持ち出しも多い(業者によっては簡略で廉価なプランもある  
が)。在所やお世話になった方々へどこまでご案内すべきか、新聞告知は事前か事後にす  
るか、見た人も参列に悩んだり、後日自宅への弔問客がだらだら続くこともある。

多くの知人に囲まれ賑やかに葬儀を出したいという気持ちと、慣習のお付き合いはなる  
べく省いて、近い人で静かにゆっくりお見送りをしたいという気持ちでも揺れる。少子高  
齢化・過疎化・簡素化が進むが、煩わしさの中に大事な経験があり、たとえ義理で参列し  
ても救われた遺族もいる。お見送りは、人の縁の重みに出会えることを知っておこう。



■この言葉は蓮如上人の『御文章』4帖目第9通をもとにしています。蓮如上人がその『御文章』をお書きになったのは、延徳4年(1492)6月のことです。それは、疫病（えきびょう）が流行して多くの人々が亡くなっていった年でした。

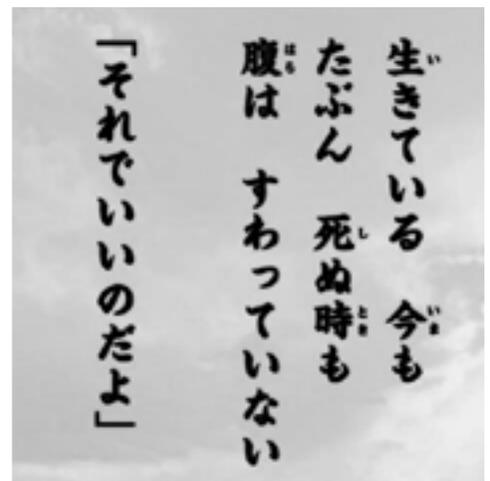
『御文章』のなかで蓮如上人は、「このごろ疫病が流行し、多くの人々が亡くなっておられます。しかし、人は疫病のせいで死んでしまうのではないのですよ。死ぬということは生まれたときから定まっていることであって、それほど驚くことではないのですよ」（取意）といわれます。思わず「ええ?!」と思うような内容です。

いま現在、世界中で新型コロナウイルスに感染して多くの方が亡くなっておられること

を思うと、たいへん厳しい言葉です。しかし、蓮如上人は、決して、亡くなった方やその家族の心情を無視されたわけではなく、また、医療の努力を無駄なことだとしてこのようなことをおっしゃったのではありません。蓮如上人自身、病気などで何人もご家族を亡くされた方ですので、その悲しみは深く知り抜いておられたはずです。それを踏まえると、この言葉には、「私が、いま、ここに生きているということの根底を見つめることが大事ですよ」という思いを受け止めることができます。

人間に限らず、この世に生まれてきたものは、いつか必ず死にます。私たちはそれを当たり前のことと思っていますが、実際には、それを忘れて日々の生活を送っています。いつ、どこで、どのような形で死がおとずれるかも知らず、いざ、自分や家族に死が迫ってくると、その現実のありように恐れおののくのです。『御文章』では、先の言葉に続いて、「そのようなものをこそ必ず救う」とはたらき続けてくださる阿弥陀（あみだ）さまの救いが示されています。そして、阿弥陀さまの救いにおまかせして、お念仏を申す生き方をお勧めになっているのです。（西本願寺 HP より転載、下記も）

■生きている今も、そしてたぶん死ぬ時も、心がさだまらず不安がいっぱいであり続けるのが私たちです。「それでいいのだよ」は、「いい」とか「悪い」とかを、私たちが判断することではありません。私たちの側は、「そのまま救う」とのおよびかけを、「そのまま」受け入れるだけなのです。私たちにとっての生き死にの一大事については、この阿弥陀さまの救いはたらきによるしかないのです。（抜粋）



## ■ウイルスの実態と合わない対策 過剰な恐怖広げた専門家

ウイルスは感染者の体外に出て寄生する細胞が無くなると、少し時間が経てば活性を失う。本当はウイルスは細菌より接触感染のリスクがずっと低いのです。なんでもアルコール消毒をする必要はありません。

プラスチック面では比較的長く生き残るという論文はありますが、それは1万個弱のウイルスが最後の1個まで死ぬのに、3、4日かかったというもので、ウイルスは最初の1時間でほぼ10分の1に減っています。ウイルスの初期量が少なければ、もっと短い時間で感染リスクはなくなる。私たちは、まるで街中のドアノブに生きたウイルスがうようよいるかのようなイメージを刷り込まれている感じですが、それを証明した人はいません。

リスク評価の根幹は、具体的な確率を検討することです。『可能性がある』と語って人々に対策を求める専門家がメディアで散見されますが、キャスターや記者は『それなら感染する確率はどれぐらい?』と問わなきゃいけない。専門家に課されているのはリスク評価です。どれくらいあるか定量的に評価しなければなりません。

ゼロリスクを求めれば、『念のため』と対策もどんどん大きくなる。しかし、その下で数多くの弊害が出ています。人と人の関わりが無くなったり、差別してしまったり。職を失い、ウイルスでなく、その対策で命を落とす社会的弱者もいる。スーパーで買ったポテトチップの袋までアルコールで拭くのは、ウイルス学者の私には笑っちゃうような話だけど、笑えない。葬儀の問題も同じ。息をしないご遺体からウイルスは排出されません。皮膚に残っていたとしてもお清めをするか体に触れなければいい。

(国立病院機構仙台医療センターウイルスセンター長・西村秀一 朝日新聞 7/11 より)

## ■日本で重症化率・死亡率が低いワケ～「感染7段階モデル」

発表されている数字はあくまでもPCR検査で判明した「PCR陽性者判明数」であり、正確には「感染者数」ではない。もちろん「発症者数」でもない。

初期から中盤までは、暴露力(体内に入り込む力)は強いが、伝染力と毒性は弱くおとなしいウイルスである。しかし、1万～2.5万人に1人程度という非常に低い確率ではあるが、サイトカイン・ストーム(免疫暴走)や血栓形成という状況を引き起こし、肺を中心に多臓器の重篤な障害により、高齢者を中心に罹患者を死に至らせてしまう。

(現段階得られる情報で)シミュレーションの結果は、国民の少なくとも3割程度がすでに新型コロナの暴露を経験したとみられ、その98%が無症状か風邪の症状で済む。すなわち自然免疫までで終了。獲得免疫が出勤(抗体が陽性になる)する人は暴露者の2%程度で、そのうち、サイトカイン・ストームが発生して重症化するステージ5に進む人は、20代では暴露した人10万人中5人、30～59歳では同1万人中3人、60～69歳では同1000人中1.5人、70歳以上では同3人程度ということになった。

日本では、ウイルスが現状の性格を維持する限り、どんなに広がっても10万人中3人以上、つまり全国で3800人以上死ぬことはなさそうだというのが、我々の結論の一つだ。

一方、全国で人口10万人に対して16人が自殺で亡くなっている。過去に景気が悪化したときは24人になった。そうであれば、新型コロナによって2人亡くなるのを防ぐという、対策のメリットとデメリットのバランスを考えないといけないのではないか。

(国際医療福祉大学大学院教授・高橋泰 東洋経済オンライン 7/17 より)

\*「未知」という恐怖は差別偏見を助長する。相手のことを良く知れば余裕が生まれる。

## 2020年：戦後75年間の核兵器使用の危機と削減への歩み

調べるほど知らないことばかり。被爆国でありながら核をめぐる現実的議論のない日本。複雑な警報システムや駆け引きのエラーで、これからも原爆使用が未遂であり続けることができるのか？

7万 6万 5万 4万 3万 2万 1万発

### 世界の核兵器保有数の推移

★ 1986年、70480発（米露英仏中5カ国）がピーク。  
米国は独伊蘭ベルギー各基地にも数百発配備。98年に印パ、05年に北朝鮮、09年にイスラエル（非公式）が保有。開発疑惑国にイラン、シリア、ミャンマー。

### 世界の核実験

冷戦期から90年代初頭にかけて約2000回。ソ連（露）726回、米国1127回。仏200回、英国（米と共同含む）と中国は45回行った。

### 世界の核弾頭数 20.6.1

ロシア 6370、米国 5800  
中国 320、仏 290、英 195、印 150、パキスタン 160、イスラエル 80-90、北朝鮮 35 計 13410 発。米露（解体待ち除く）で全体の87%保有。  
\*データは一部不確実。

- 1945 \*太字は主に米国が核兵器使用を検討、又は未遂に終わった事件
- 1945 ・米、世界初の原爆実験 広島に16kt、長崎に22ktの原爆投下
- 1950 ・朝鮮戦争始まる
- 1951 ・朝鮮戦争膠着、マッカーサーが中ソ都市に原爆投下を提案
- 1954 ・米、ベトナム戦線の仏軍への原爆提供申し入れも欧州抵抗
- 1955 ・広島で第1回原水爆禁止世界大会開催
- 1956 ・第2次中東戦争（スエズ危機）にて米ソ互いに威嚇
- 1957 ・ソ、ウラルの核惨事：核兵器工場で化学爆発 IAEA 発足
- 1958 ・台湾海峡危機に際して軍部が戦術核兵器使用提案
- 1962 ・米、ビキニ環礁水爆実験「死の灰」で第五福竜丸 23 名被爆
- 1962 ・キューバ危機：ソ潜水艦副長一人が核魚雷発射認めず  
この頃核実験は大気圏内から地下へ移行
- 1963 ・米英ソ、部分的核実験禁止条約（PTBT）に調印
- 1964 ・中国核実験 米、ベトナム軍事介入
- 1968 ・米艦船プエブロ号の北朝鮮だ捕事件：ソが仲介
- 1970 ・ベトナム戦争・ケサン攻防戦で戦術核使用許可を密電
- 1970 ・核不拡散条約（NPT）発効：191カ国・地域が締結  
～米ロ英仏中の5カ国以外への核兵器の拡散防止を目的
- 1971 ・日本、非核三原則を決議
- 1973 ・第4次中東戦争で対ソ：エジプトがイスラエルと会談で回避
- 1974 ・インド地下核実験
- 1979 ・米、スリーマイル島原発事故
- 1983 ・ソ、ペトロフ中佐事件：米核ミサイル飛来検知を誤報と退け
- 1986 ・ソ、チェルノブイリ原発事故
- 1988 ・米ソ、中距離核戦力（INF）廃棄条約発効～地上配備の中距離核ミサイルが欧州から撤去
- 1989 ・米ソ首脳マルタ会談、冷戦の終結を表明
- 1991 ・湾岸戦争でのイラクの化学兵器使用を抑止（異論あり）、5kt核弾頭投下？、劣化ウラン弾汚染で帰還兵や住民に健康被害
- 1991 ・米ソ、第1次戦略兵器削減条約（START I）調印
- 1995 ・NPT 無期限延長決定 東南アジア非核兵器地帯条約署名
- 1995 ・露大統領、米国ロケット発射（後に誤報判明）に反撃回避
- 1996 ・国連、包括的核実験禁止条約（CTBT）採択～16年現在  
183カ国署名 166カ国が批准も、米中など未批准で未発効
- 2001 ・米、同時多発テロ
- 2003 ・イラク戦争始まる：劣化ウラン弾 北朝鮮 NPT 脱退宣言
- 2011 ・福島第一原発事故 米露、新戦略兵器削減条約発効
- 2014 ・クリミア危機、露による戦術核兵器の準備
- 2017 ・国連で核兵器禁止条約採択～製造、保有、使用、援助、威嚇の禁止。現在 82カ国署名 43カ国批准。日本や核保有国不参加 核兵器廃絶国際キャンペーン ICAN にノーベル平和賞
- 2018 ・米、核戦略見直し（NPR）中距離核戦力全廃条約破棄を表明
- 2019 ・中距離核戦力廃棄条約失効 ローマ教皇、長崎広島訪問

## 最期は“おまかせ”

◆「終活」「エンディングノート」という言葉が、今ではほとんどの人が知る言葉となり、「最期まで自分らしく生きる」ということが、医療や介護の現場で指標として掲げられることが多々あります。

しかし、私はこの「最期まで自分らしく生きる」ということに少々疑問を感じます。

なぜなら、「最期の時間」いわゆる終末期（回復する見込みがなく、死が間近に迫っている状態）に「自分らしく生きられない」方が多いからです（だからこそ、最期まで「その人らしさってなんだろう」と介護する側が追求することはとても大切なことですが…）。

私は介護の仕事で「看取り（お亡くなりになるまでお世話すること）」をさせていただいております。終末期は食べること、排泄すること、着るもの、寝る姿まで全てと言っていいほど“おまかせ”です。

エンディングノートに、認知症になったらこうしてほしい、葬儀はこうしてほしい、お骨はこうしてほしい、と記入しても、それを実行してくれるのは自分以外の誰かです。

「自分らしく最期を迎える」ということは、それまでのその方の生き方がとても反映されることなのだ、この仕事を通じて教えていただきました。自分の撒いた種が芽を出し刈り取る時期、それが終末期、つまり「おまかせの時期」だと私は思うのです。（C）



\*家族の思いやりといえは聞こえは良いが、互いの自己主張がぶつかりあうと（葬儀やお骨に限らず）対立が起こる。それ以前に、フレイル（虚弱）状態になったり、認知力が低下しいよいよ自分一人では生活維持が難しくなって、家族に頼らざるを得ない時期をどう過ごすかのほうが現実悩ましい。自分は謙虚で配慮のできる人間だと自惚れている人ほど難しくなるかもしれない。良くも悪くも長年培ってきた関係性が、それを裏切ることなく証明してしまう。仏教は全て、執着を離れよと教える。実践する人は軽やかだ。中高年以降は特にここがけよう。

▼七月の豪雨災害で犠牲になられた方々、被災された方々にはお見舞いを申し上げます。

延期した東日

本大震災九周年  
超宗派の追悼行事も、「災害犠牲者追悼の集い」として七月二八日に福井市徳尾町の禅林寺にて開き、声楽家による歌も響き渡りました。

今年 戦後

七五年、日米安保条約改定六十一年の節目、ベトナム戦争終結から四十五年、東西冷戦終結から二九年、米国911テロより十九年にあたります。米中、東アジア、中東情勢、覇権争いはどこで収まるのでしょうか（S）



\*新型コロナウイルスの影響から、年忌法事や葬儀に関してのご相談を頂戴していません。感染予防やお身内での営み方など、どうぞお問い合わせください。

住職・林 暁

携帯・090-9765-1343